

西日本における縄文時代貝塚の出現と形成に関する研究

要旨

中央大学大学院文学研究科日本史学専攻博士課程後期課程

遠 部 慎

西日本における縄文時代貝塚の出現と形成に関する研究

要旨

論文の主題（テーマ）

日本は四方を海に囲まれ、多くの離島を有する海洋資源の豊富な国である。海産資源を日本人が積極的にかかわることになるのは、縄文時代からである。そのことを証明するように日本全国に、縄文時代の貝塚は存在する。ところで、その貝塚のほぼ90%は東日本に存在し、西日本にも数多くの貝塚が存在することは、あまり知られておらず、その評価も定まっていない。しかしながら、西日本における貝塚は正確にその位置づけがなされていないだけで、考古資料に基づいた年代学や関連諸科学を駆使することによって、大きくその評価が変わる可能性が高い。そのような評価を与えることで、西日本において、先史社会における人類が、温暖化に伴う「海」との出会いをどのようにとらえ、どのように対応していったかを、考古資料を中心とした分析を行うことで、明らかにすることが可能ならずである。

本研究では、西日本において貝塚が出現・展開する縄文時代前半期を把握するために、まず考古学的に大まかな土器編年網を整備する。文字のない先史社会を復元するうえで人類の具体的な動態を探る上で、土器編年の整備は不可欠である。そのうえで、土器に付着した炭化物を中心とした年代測定を実施することで、実年代を明らかにする。土器という考古学的なコンテキストの高い試料を主に扱うことで、第三者による検証も可能となる。また東日本の特に北海道などの土器付着炭化物測定データに代表されるように、海洋リザーバ効果の影響を西日本では考慮する必要があまりなく、実年代を明らかにする作業を行う上で、試験的にも適切な地域である。最終的に日本を含めた世界史での位置づけを考えるためにも、実年代に基づく議論ベースを構築する。

そのうえで、考古医学的なコンテキストに基づいた出土位置等が明確な貝類資料を分析する。海産資源の正確な位置づけを探る上で、個々の貝塚の適切な試料を分析し、その年代的な位置づけを確定する作業は、海洋リザーバ効果の問題もあり、積極的でなかった。しかし、海産資源の利用を考えるうえで避けては通れない問題であるため、そこを集中的に分析することで、西日本における先史時代における初期の海産資源の利用形態の変遷を明らかにする。

当該研究分野における位置づけ

閉鎖性海域である瀬戸内海は、東西（大阪側と大分側）より海水が流入し、成立する。そして、その水深は平均40メートル程度であるが、全体的な傾向としては東に行くほど浅くなるという特徴をもつ。

この瀬戸内海において、人類の海産資源に利用を如実に語る貝塚が出現・展開する縄文時代前半期いわゆる海進期の研究は少なく、具体的年代データは乏しかった。そのた

め、個々の貝塚群の関係性が読み解きにくい現状がある。

特に海洋リザーバ効果のみに着目し、大きく貝塚群をまとめることは有益でない。そのため、発掘資料に基づく基本的なデータ整理が必要であり、そのような研究が必要といえる。瀬戸内海では、系統的に貝塚群の変遷を負うことが可能な貝塚群が存在するため、それらを分析する。なお、世界史的には、中石器文化の時期にあたる。

論文の構成（目次と各章の概要）

本論は以下の5章の構成からなる。

序

第1章 縄文海進と押型文土器研究

2014年に発表した「東海地方における押型文土器期の年代測定集成」『東海地方における縄文時代早期前葉の諸問題』などを下敷きとし、これまでの縄文海進期の年代測定に関する諸研究について、まとめた。その中で、半世紀以上前のデータでもいまだに大きな意味をもっていることが明らかとなった。

第2章 押型文土器の年代整理

2009年に発表した「第4部 分析・考察 第9章 上黒岩遺跡の押型文土器の炭素14年代測定」などを下敷きとし、西日本の押型文土器編年と、土器付着炭化物を基軸とした年代整理を行った。

第3章 貝類の年代測定

2009年に発表した「貝類の年代測定」を骨子として、貝類に関する年代測定を実施するうえでの基本的な方針を整理した。貝種の違いによって、整理することが可能であることを示した。

第4章 瀬戸内海の縄文時代早期貝塚の年代研究

西日本の中でも、押型文土器期の貝塚群のまとまっている瀬戸内海の貝塚の考古学的整理を行い、おもに汽水性、鹹水性の貝塚の分類を行ったうえで、年代測定を行った。ここでは、各事例について、具体的にまとめる。

礼田崎貝塚の研究 2007年に発表した「瀬戸内海最古の貝塚—豊島礼田崎貝塚の再評価」を骨子とする。本研究の結果、瀬戸内海最古の貝塚であることが確定した。

井島大浦の研究 礼田崎貝塚に後続する未検討の貝塚について、検討を加えた。汽水性貝塚としては礼田崎に後続する部分が確認できた。

犬島貝塚の研究 2008年に以降に発表した『犬島貝塚の発見』（六一書房）を骨子として、各論考をまとめた。瀬戸内海では約半世紀ぶりの発見となる縄文時代早期貝塚であり、新たなデータの提示ができた。

黄島貝塚の研究 2003年に発表した「黄島貝塚再考」および2008年に発表した「黄島貝塚の年代測定」を骨子として、黄島貝塚の年代についてまとめた。8400±350BP という

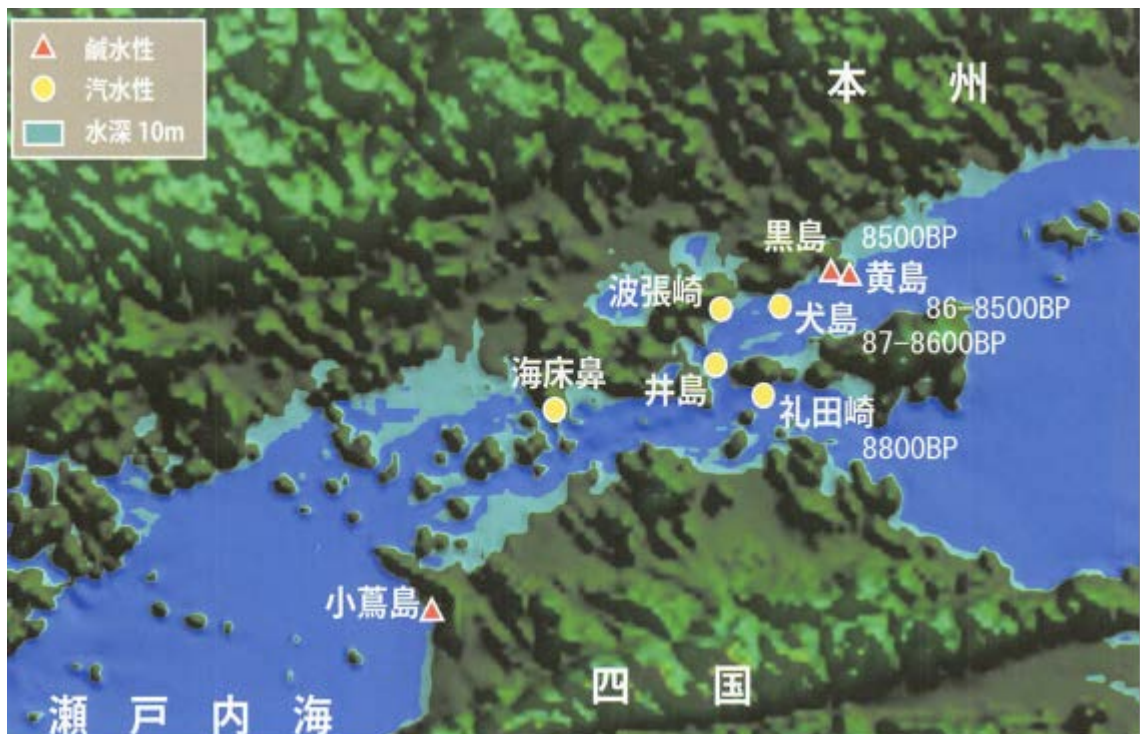
よく知られた測定値のほかにも新たなデータを追加した。

黒島貝塚の研究 2005年に発表した「広島県立歴史文化博物館所蔵資料紹介：岡山県瀬戸内市黒島貝塚」2007年に発表した「瀬戸内海における縄文海進期の基礎的検討」を骨子とし、これまで年代データがほとんどなかった本貝塚の年代研究を行った。

第5章 まとめ

以上の検討の結果、土器付着炭化物を用いて、西日本の押型文土器の実年代を大川式 9150-8750calBC、神宮寺式 8650-8450calBC、神並上層式 8300-8250calBC、山形文期 8250-7950calBC、黄島式 7600-7400calBC、高山寺式 7400-7200calBC、終末期 7100-6800?calBC と整理した。

さらに、瀬戸内海の貝塚群の貝種組成を整理し、ヤマトシジミからハイガイへと変遷することが明らかとなった。こうした変化は、半世紀前から指摘されてきたことではあったが、ヤマトシジミ段階が土器型式でいう山形文期を主体とする段階に出現し、ハイガイの出現はおおむね黄島式期に該当し、さらに両者の中にも段階差が認められる可能性が高いことが明らかになった。黄島式以降については、瀬戸内海島嶼部では貝塚を形成していない可能性が高い。つまり、瀬戸内科医の形成に伴い、貝塚群が陸へと推移している可能性が高く、環境変動等に伴って、遺跡立地が変化している可能性が高いと考えられた。



瀬戸内海における縄文時代早期の貝塚群とその年代

論文の独自性

本研究では、可能な限り、自身のオリジナルの分析データをもとにして、西日本の先史社会の海産資源利用を明らかにした。本研究では申請者自身が選択した、自身のオリジナルの分析データをもとにして、当該時期の研究に取り組んだ。そのため、検証等も可能であり、またその考古学的なコンテキストも整っている。

土器編年に立脚し、自身が分析した土器付着炭化物を中心とした年代測定値で基礎的な実年代を整理したことにまずオリジナリティがあるが、そこに貝類の年代測定を加え、海洋リザーバ効果の問題を、考古学的なコンテキストを整えることで、各貝塚間で優位な差異があることを明らかにした。このことは、今後、先史時代における多様な貝類利用のあり方を整理するうえで有益である。各遺跡の事例を着実に読み解いていくことは、考古学以外の分野にも研究が広がっていく可能性が高く、遺跡試料の有効性を最大限活かすことにもつながる。

また海環境の変化と、貝塚の終焉が軌を一にしている可能性が高く、海と人の関係を考えるうえできわめて大きなモデルケースが提示できたと考える。より具体的に言えば、ヨーロッパのスター・カー遺跡などと類似した状況が連想される。

今後の課題

貝殻成長線分析をはじめ、本研究で整理した分析事例は、次なる展開が期待される。また、九州地方や東海地方などの関連する原稿についてもまとめており、押型文土器期全体を見通した検討も今後の課題となる。特に今回分析を行った海岸部と、まだ検討事例の少ない山間部との問題や、東日本との関係などについても今後の大きな課題となることが予想されるが、本研究で構築した骨子が、大きく変更する可能性は低いため、今後も当該期研究において、大きな基礎的な研究となることは間違いない。

ただし、本格的な海産資源の利用段階（前期段階）までのプロセスが不明な部分が少なくない。そこで今後、早期後半～前期段階を中心とした試料の収集および、分析を加えることで、長期的な視野にたった人類の海産資源利用のあり方について検討が可能となる。縄文時代前期以降についても、現在分析を進めており、さらには動物骨のデータや安定同位体の分析データについても今後、詳細に検討を重ねていきたい。